

創世記3章 「罪の始まり」

1A サタンによる誘惑 1-6

2A 神のもたらす呪い 7-19

1B 神から隠れる人 7-13

2B 罪の結果 14-19

3A エデンからの追放 20-24

本文

私たちは、創世記3章に入ります。創世記は、「初め」という意味がありますが、全ての始まりを示しています。3章においては、「罪の始まり」が描かれています。もし、この出来事が起こっていなければ、聖書の残りの話はなかったことでしょう。ここで起こったことを、神がどのように対処してくださるのか、罪からの救いが神のご計画の多くの部分を占めています。

創世記3章を読む時は、次の二つの新約聖書の箇所を覚える必要があります。一つは、ローマ5章12節です。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、..それというのも全人類が罪を犯したからです。」アダムの罪によって、世界に罪が入り、そして死が入りました。けれども、ローマ5章は続けて、キリストの正しい行いによって、信じる者が義と認められ、命が与えられるという恵みの支配を教えています。アダムにあって全ての人々が罪を犯しましたが、キリストにあって信じる者には義が与えられるのです。もう一つの御言葉は、コリント第一15章21-22節です。「というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。」アダムによって、人が死ぬように定められましたが、キリストによって死んでも生きるようにされました。したがって、アダムによって始まった罪と死の問題を、キリストによって終わらせる働きを神は用意されました。

1A サタンによる誘惑 1-6

3:1a さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。

私たちは前回、主が六日目にすべての獣を造ってくださり、さらにご自身のかたちに人を造ってくださったことを読みました。さらに、人に対してそれら獣を支配させ、地上を支配させる命令を与えられました。人は、獣の一つ一つに名前を与え、また土地を耕すようになりました。彼は今、エデンの園にいます。けれども、独りであったので神は助け手を彼から造られました。そこで自分は人、イシュであるが、彼女を女、イシャーと呼ぼうと言って名づけたのです。

けれども、神の造られた獣の中で蛇がありました。一番狡猾であった、とありますが、これは蛇そのものが狡猾なのではなく、蛇によって現われたサタンが狡猾であるということです。黙示録 12 章 9 節にこうあります。「こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」この創世記に出てくる蛇のことを「あの古い蛇」と呼んでいます。そして興味深いことに、彼は「竜」とも呼ばれています。創世記 3 章に戻りますと、蛇が神から呪いを得た後に地を這うようになっています(14 節)。つまり、エバに語りかけた時には地を這っていなかったことが考えられます。したがって、蛇であります、同時に竜のように動いていたことが考えられます。

聖書には、竜の存在が出てきます。例えばヨブ記 41 章に出てくるレビヤタンは、海の中にいる火を噴く怪獣のような姿です。蛇は元々「輝くもの」という意味があります。私たちはサタンや悪魔のことを、真っ黒で熊手の槍をもった存在のように想像しますね。あれはミルトンの「失樂園」に出てくる悪魔で、聖書の描く悪魔ではありません。彼は輝いており、非常に魅力的でありました。「エゼキエル 28:12 あなたは全きものの典型であった。知恵に満ち、美の極みであった。」コリント人への手紙第二 11 章 15 節に、「サタンでさえ光の御使いに変装するのです。」とあります。つまり見た目に良いもの、好ましいもの、自分が正しいと思っているもの、実際はそうではないのに、美しく見せるのが悪魔の仕業なのです。

3:1b 蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

神はアダムに対して、次のことを命じられました。「2:16-17 あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」この言葉をアダムは妻に対して告げていたのです。蛇、サタンは、アダムに対して挑むのではなく、女を惑わすことによってアダムが罪を犯すように企みました。

悪魔が行なったのは、初めに「神の言葉に対する疑い」です。「神は、ほんとうに言われたのですか。」と言っています。私たち人間が神と関係を持つとき、それは神の言葉があり、その言葉に完全な信頼を寄せている時に関係を持つことができます。神は霊であり、私たちも霊をもって造られました。そして神の御霊によって交わる時に、神を疑いなく信じており、その語られる言葉を幼い子が親の言いつけを守るように守るのです。イエスが弟子たちのことで、父なる神をほめたたえた時に、「これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。(ルカ 10:21)」と言われました。

悪魔は、そうした無垢な状態を汚そうとしています。「ほんとうに言われたのか」と言って、神の言葉に疑いを入れようとしています。さらにサタンが行なうのは、神の良さ、神の善に対して疑いを

入れようとしています。神があたかも、どんな木からも取って食べてはならないと言われたかのようになっています。神は良いことを語られたのに、それを悪い意図で行っているかのように中傷しているのです。

3:2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。3:3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」

女が惑わされています。彼女の言葉は、神の言われたことから外れており、取り除かれているし、また付け足されています。まず、「園にある木の実を食べてよい」と言っていますが、神はアダムに、「思いのまま食べてよい」と言われていました。このような神の気前良さを、エバはすでに忘れていきます。次に、園の中央にある木には、いのちの木と善悪の知識の木があります。善悪の知識の木から実を取って食べてはならないという命令なのに、それを特定していませんでした。神の命にあずかる、その貴重な命の木から実を取って食べてはならないとまで、拡大解釈できてしまいます。それから、「触れてもいけない」という付け足しを行っています。確かに、善悪の知識の木に触れないほうが賢明ですが、しかしそれでも、神が命じていないことを神の命令であるかのように掟を作っていく、律法主義の萌芽がここに見えます。

なぜ、彼女はそうなってしまったのか？それは、悪魔と対話したからです。彼女は素直で良さそうなのですが、悪魔に対してははっきりと、「あなたは、出て行きなさい。神は、「それを食べてはならない。」とされている。」と彼の囁きを拒むべきだったのです。イエス様はサタンに対して、「引き下がり、サタン。(マタイ 4:10)」とされました。対話するのではなく、拒否するのです。ヤコブ書4章7節に、「神に従いなさい。そして悪魔に立ち向かいなさい。」とあります。けれども彼女は、彼と対話してしまいました。それで彼女の心の防御機能が落ちてしまい、それで彼女の、神の御言葉に対する記憶力が弱まってしまっています。

3:4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

イエス様が悪魔について「偽りの父」と言われています。「彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。(ヨハネ 8:44)」神は真理であります、悪魔は偽りであります。

そして悪魔は、「あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになる」という誘惑を与えています。これが先週学んだ、「善悪の知識の木を神が置かれた」理由です。それは神だけが持つておられる善悪の知識であり、人は神に完全に委ねなければいけないのです。それを「いやだ、私が

善悪の知識を得たい。」とするところに人間の欲望があり、それを悪魔がいま誘っているのです。悪魔はまさに、この罪を犯して墮落しました。イザヤ書 14 章に悪魔が墮落した場面が出てきますが、「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』（イザヤ 14:13-14）」同じ罪の中に悪魔が私たちを引きずり出そうとしているのです。

そしてもう一つの悪魔が言ったことは、「神は知っているのです」という言葉です。神は意地悪だから、あなたがたに敢えてそれを食べさせようとししないのだ、と疑わせています。いいや、彼らの最善を願われて、それを食べてはいけないと言われたのに、意地悪をしていると思わせているのです。ちょうど、熱くなっているストーブを触ってはいけないと親が言っている言葉を、「僕に意地悪しているんだ。」と思う小さな子供に似ています。

3:6 そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

ヨハネは第一の手紙において、世にある欲が3つあることを教えています。「2:16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」と言いました。「まことに食べるのに良く」は肉の欲です。そして、「目に慕わしく」は目の欲です。そして、「賢くする」は、暮らし向きの自慢です。英語では”pride of life”であり、人生における高慢な姿勢という意味合いがあります。これが罪の原因であり、自分で生きるという自分が力と知恵の源泉であるという考えです。

この三つの誘惑に負けたわけですが、希望は、私たちの主イエス・キリストです。イエス様も、公に活動を始められる前に悪魔から誘惑を受けられました。マタイによる福音書を開いてください。4章 1 節からです。

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言

われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。(1-11 節)

「石がパンになるように、命じる」のは「肉の欲」です。そして、「御使いが、手で支えてくれる」というのが目の欲です。それから、「国々の栄華をあなたに与える」というのが暮らし向きの自慢です。自分がいかに優れているか、栄光と称賛を人々から受けることが誘惑でした。けれども、イエス様はその一つ一つに神の御言葉によって対抗し、そして最後に「引き下がれ、サタン。」と言ってサタンを退けられたのです。したがって、私たちがイエス・キリストを仰ぎ見て、この方についていく時に、エバが受けたのと同じ惑わしに対しても打ち勝つ力が与えられます。

こうして女は惑わされ、男は罪を犯しました。聖書では女が罪を犯したとは書かれていません。なぜなら、直接、主の声を聞いていたのはアダムであり、女ではなかったのです。主に語られていることを聞きながら、それを違反したということが罪だったのです。

2A 神のもたらす呪い 7-19

1B 神から隠れる人 7-13

3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

これは、彼らの霊が神から引き離された瞬間です。これまで神に拠り頼んでいたのが見えなかった裸が見えるようになりました。彼らは神が言われたようにその場で死ぬことはありませんでした。けれども、実はこの時点で死んでいます。神は「必ず死ぬ」と言われた時に二つの死を意味しておられました。霊的な死と肉体の死です。肉体の死は、後にアダムとエバが死ぬことによって実現します。けれども、霊的な死はここで神の御霊から離れてしまっているところから始まっています。ちょうど血液が存在していても、それが流れていないと即座に脳が死んでしまうように、たとえ霊があっても神との生きた交わりがなければすぐに死んでしまうのです。

そして、恥が出てきました。これまですべてが透明であり、すべて交わることができ、神との間でも二人の間でも、すべてが親密な交わりの中で一つになっていたのに切り離されてしまった瞬間です。罪を持ったままで神の前に現れる時、裸を見せるようになることを他の箇所では話しています。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

そして彼らが取った行動が、「いちじくの葉をつづり合わせた」ことでした。いちじくの葉は、中東で葉が最も大きいものだと言われています。それを使って、覆いを作ったのですが、その後の話を読めばすぐ分かるように、神が来られたら、恥ずかしくてすぐに隠れました。ここで大事なものは、この文章の主語です。「そこで、彼らは・・・」とあります。罪によってもたらされた恥を、彼らは自分自

身で覆おうとしています。自分自身で罪意識を取り除こう、罪を償おうとしているのです。言い換えれば、人の行ないによって救いを得ようとしている姿です。

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。

ここの「歩き回られる」というのは、ヘブル語で「いつも習慣的に歩き回っておられた」という意味合いがあります。いつもならば、ちょうど昼下がりの少し涼しくなってきた時にアダムとエバのところに來られて、いろいろ語り合いをされていたのだらうと考えられます。けれども、「主の声」を聞いたとたんアダムとエバは恐れしました。これが、罪がなせる業です。罪は、神と私たちの間に仕切りとなります。「あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。(イザヤ 59:2)」神が私たちを怒って、離れ去られたのではなく、罪があるために私たちが神に近づけないようになってしまったのです。

3:9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

ここの神の声をどう受け止めるでしょうか？ 恐い親父のように、「お前、どこにいる？」と怒っている声に聞こえますか、それとも、息子を失った、泣いている父親のように聞こえますか？ 真実は後者です。イエス様は、放蕩息子の喩えによって遠い国に行ってしまった息子を家の外でいつも待っている父の姿として神を描いておられます。

3:10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」3:11 すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」3:12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」

罪は恥をもたらすだけでなく、恐れをもたらします。彼は恐れて、隠れました。罰を恐れていたのです。「1ヨハネ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」そして罪を犯したアダムは、その罪の性質をここでよく表しています。「責任転換」です。しかも、責任を神になすりつけています。「あなたが私のそばに置かれたこの女が」と言っています。

3:13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」

女も責任転嫁をしています。蛇が惑わしたと言っています。私たちが神の前に立ち返るために、まずしなければならないことは、罪を認めることです。環境や周囲の人のせいにするのではなく、

責任を自分で取ることです。「私が罪を犯しました。」この単純な告白をする時に、神は私たちを回復させてくださる第一歩が始まります。

2B 罪の結果 14-19

3:14 神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。

神は蛇に対する呪いを宣言されています。「塵を食べる」という言い回しを見て、聖書批評家は、蛇は土を食べることはないのだからこの箇所は非科学的であり、間違っていると言います。そうではなく、聖書では卑しめられ、低められ、頭を上げることができないようにされている状態をしばしば、「塵を食べる」とか「塵を舂める」という表現をします(例:ミカ 7:17)。この卑しめられた、屈服した状態を示す比喩的な表現です。

3:15 わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

ここに、初めのメシヤ預言があります。神は罪を犯したアダムとエバに対して、女の子孫によって悪魔が行なった、神と人を引き離す仕業を打ち砕く約束を与えてくださいました。

「女の子孫」というのは、きわめて不自然な言い回しです。英語では"Seed"であり、日本語でいうならば「子種」です。精子とも訳すことのできる言葉です。したがって、聖書では「子孫」と言う時は父から出てきた子のことしか書いていません。ところがあえて神は、ここに「女の子孫」と言われているのは、これが人間の父と母の間に生まれた、罪の性質を受け継ぐ子ではなく、神から生まれる子を、女を通して与えるというメシヤ預言なのです！イザヤは、神から次の預言を受けました。7章 14 節です。「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」男を通してではない、処女によって男の子を生み、彼がイザヤ書 9 章 6 節によると、神の子であり、父なる神と一つである方なのです。したがって、ここは処女マリヤから、イエス様がお生まれになる預言です。

そして、この方が「おまえの頭を踏み砕く」とあります。蛇は尻尾を踏まれても何ともありませんが、頭を踏みつけられたらお仕舞いです。けれども蛇は、「彼のかかとかみつく」とあります。これはキリストの十字架を指しています。悪魔は、キリストを十字架につけるよう仕向けることによって、彼の踵に噛み付きました。それは強い痛みが走ったことでしょう。けれども、しょせん踵なのです。蛇をふり払って、その同じ足で蛇の脳天を打ち砕くことができます。

それがキリストの十字架と復活の御業です。キリストが死なれた時、それは暗闇の支配、暗闇の勝利であるように見えました。けれども神はそれを全人類の罪を赦す、罪のいけにえとしてお定め

になっていたのです。したがって、悪魔は人を神から引き離し滅ぼすどころか、むしろその十字架の御業によって人が神に近づくことができる機会を与えてしまったこととなります。これで、悪魔は完全に敗北したのです！「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。(ヘブル 2:14-15)」そして将来、私たちキリスト者が、この方にあつてサタンを踏みつけます。「ローマ 16:20 平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。」

蛇の子孫とは、最終的には反キリストによって現われます。しかし再臨のキリストが彼の脳天を打ち砕きます。それによって千年後、悪魔自身も火と硫黄のいけに投げ込まれます。

3:16 女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」

次は女についての呪いです。神は女が子を産む時、激しい苦痛がともなうようにされました。罪を犯す前は、出産は痛みを伴うようになっていなかったのです。そしてもう一つの呪いは、夫からの支配です。女は男の助け手として造られました。女のかしらは男というのは神の秩序ですが、女が男の脇から造られたというのは、彼女が夫と共に歩む人であった、ということです。

ところが、そこに乱れが起きました。女は男との関係に満たしを求めようとします。男を自分のものにしたい、所有物にしたいと願います。「恋い慕う」というのは、ただ恋しいのではなく、自分の所有物にしたいという欲望です。ところが、その欲望はいつまでも満たされません。男はただ女を支配するだけです。しばしば男性は支配欲があるが女性にはない、と言われます。それは大きな間違いです。いったん自分に任されたものが与えられたら、それを愛し、恋い慕います。そこまで良いのですが、いつしかそれを自分自身の所有物としてしまいます。例えば、しばしば、夫に満たされない妻が自分の息子に対してこのことを行います。そうすると息子は、父が不在で、母がいなければ何の決定もできないマザコンとして育ててしまいます。

女も男も、ただキリストにあつてのみ満たされます。そしてキリストに満たされている時に初めて、自分が神から与えられた分を果たすことができます。妻は夫にしたがひ、夫は妻を自分自身のよように愛するのです。

3:17 また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従ひ、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。3:18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あな

たは、野の草を食べなければならない。3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」

女は関係において呪いを受けましたが、男は仕事において呪いを受けます。神は男を、神が与えられたものを支配するという仕事を与えて祝福されました。そしてその助け手として妻を与えられました。けれども、その仕事において汗して働かなければいけないという呪いを受けます。私が、大学生の子たちに、「天国に行ったら、テレビの前でポテトチップスを食べているように何もしていないのではない。私たちは天においても神に仕え、働くのだ。」と言ったら、ちょっと拒否反応を示していました。「仕事」という言葉を聞いたとたん、この汗を流し、苦勞するというイメージが出てきたからです。私は説明しました。「仕事は本来、疲れないものだったのだ。ただ私たちが充足させるものだったのだが、アダムが罪を犯したことによって今ようになった。」

そして「土地は、いばらとあざみを生えさせる」と神は言われましたが、この時から世界は人ではなく悪魔の支配下に入りました。神は人に、地を従えよという祝福の命令を与えられましたが、人が悪魔の言うことを聞いてしまったために、その支配権が人から悪魔に移ったのです。その支配権を奪還するために来られたのが、私たちの主イエス・キリストです。主は、この地にある呪いを、象徴的に、いばらの冠をかむることによって受けられました。「それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」(マタイ 27:29)」そして、イエス様はご自分の命という対価を払って、この世界を父なる神のもとに引き渡されたのです。

この呪われた状態を、パウロはローマ 8 章でこう述べています。「被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。(ローマ 8:19-22)」

いま悪魔は、この地上に対して支配権を持っていません。いわば不法占拠です。しかし、ちょうど所有権を持っていないのにいつまでも居住している人たちがいますね。そのマンションやアパートをブルドーザーで破壊するなど強制退去を行政が行なうのですが、それがキリストの再臨です。イエス様が再び戻ってこられる時に、悪魔はこの世からいなくなり、最後はゲヘナ、地獄に投げ込まれます。

そして呪いは、「あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」という所にも表れています。私たちはこれを葬式で見るのです。日本ではほとんど全ての死体は火葬ですが、燃やされた死体は灰だけになってしまいます。土葬でも、死体は腐乱し、土の要素の中に分解していきます。しか

し、これもキリストが来られたことにより、この罪と死の法則は逆転しました。三日目に墓からよみがえられました。もはや死ぬことのない復活の体をもって生き返られました。同じように、キリストにあつて死んだ人々も、終わりの日に復活します。

3A エデンからの追放 20-24

3:21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。

ここにも神の福音があります。人がいちじくの葉で自分の恥を覆おうとしてもできませんでした。それは人が自分の罪を自分の行いで取り除こうとする試みです。けれども、人にできなくなっていることを、神ご自身がしてくださいました。神が、彼らに着物を用意してくださいましたのです。

それは葉ではなく、皮の衣でした。動物の命が取られ、血が流されました。神の、罪に対する罰がこの動物の上に置かれました。ですからアダムとエバがこれを見るときに、「私たちの罪は、ここで赦されたのだ。もうすでに血が流され、罪が洗い清められたのだ。」と実感することができたのです。これがキリストの血潮の力です。私たちを悩ます良心の呵責は、この血の力によってすべて洗い清められるのです。私たちが今、心に傷を持っていないでしょうか？過去に犯した罪について、咎めを受けていないでしょうか？どうかキリストの血を信じてください。あなたの、その咎のために、キリストの肉体から血が吹き出たのです！

3:22 神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

「われわれのひとりようになり」というのは、もはや神と人が一つになっていないことを示しています。彼らが神から離れて、独立してしまったことを意味しています。神が自分で存在しているのと同じように、まるで自分だけで存在しているようになってしまった、ということです。ここに人間の空しさと孤独感が来ます。交わるべき対象がないのです。魂に、神のみしか埋めることのできない空洞ができてしまいました。多くの人は、これを埋めるためにお金に走ったり、男女関係に走ったり、他の生きがいを求めて走り巡っているのですが、それで満たされないのです。神のみが満たすことができるものだからです。

そして、「永遠に生きないように」と神は言われていますが、この罪のある状態で永遠に生きないように、という意味です。私たちが永遠に生きられると言われても、この体のまま、不完全な状態のまま永遠に生きたいとは思いませんね。

3:23 そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。3:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

エデンの園は、ノアの時代の洪水の時までそこに存在していたようです。アダムとエバは、この近くに、東側に住んでいたのでしょう。けれども、エデンの園の入り口にはケルビムがいました。ケルビムは神の御座のそばで神を礼拝している、天使長のひとりです。エゼキエル書 1 章を読みますと、ケルビムは青銅と火の輝きがあります。聖書では、青銅や火は神の聖さから来る裁きを表していますが、そこに人間がそのまま近づけばたちまち滅ぼされてしまいます。後の時代、モーセに対して神は幕屋を造ることを命じられましたが、その入り口も東にありました。東の門を通過して、祭壇でいけにえを捧げ、聖所、そして至聖所に入り、ケルビムが彫られている贖いの蓋、そして契約の箱のところで大祭司が血を振り掛けます。したがって、同じように当時はエデンの園が神を礼拝するところであり、神の栄光の臨在が輝いていた所でした。